

# 令和7年度全国学力・学習状況調査における

## 北九州市立 南丘 小学校の結果分析と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、6年生を対象として、令和7年4月17日（木）に、「教科（国語、算数、理科）に関する調査」、文部科学省が指定した日（4月18日から4月30日の間）に「児童質問調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にさせていただきたいと思っております。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。

### 1. 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- (3) そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

### 2. 調査内容

#### (1) 教科に関する調査（国語、算数、理科）

##### 教科に関する調査（国語、算数、理科）

- ① 身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等
- ② 知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等

※調査では、上記①と②を一体的に問うこととする。

#### (2) 児童質問調査

##### 児童質問調査

- 学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

### 3. 教科に関する調査結果の概要

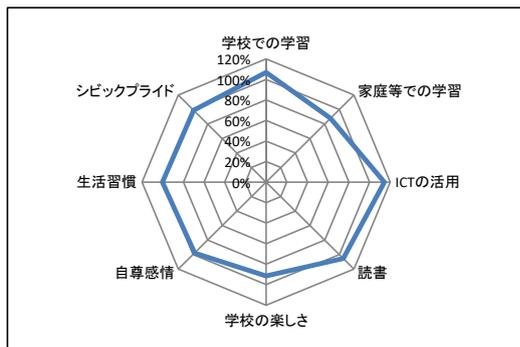
#### (1) 全国・本市の学力調査（国語、算数、理科）の結果

本年度の結果	国語		算数		理科	
	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率
本市	8.9	64	8.6	54	9.1	53
全国	9.4	67	9.3	58	9.7	57

#### (2) 本校の学力調査結果の分析

国語	全体的な傾向や特徴など	平均正答数は全体的に本市の平均をやや下回る傾向である。「話す・聞くこと、書くこと、読むこと」の三領域ともに課題があるが、「書くこと」の短答式では本市の平均に限りなく近づいている傾向がみられ、言葉の特徴や使い方に関する事項は、改善がみられる。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	学年別配当表に示されている漢字を文の中で、止しく使うことができる内容や、図表などを用いて、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができるかを見る内容。	
	努力が必要な問題	目的や意図に応じて、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができるかを見る内容や事実と感想、意見などとの関係を叙述を基に押さえ、文章全体の構成を捉えて要旨をまとめることができる内	
算数	全体的な傾向や特徴など	平均正答数は本市の平均を少し下回る傾向である。「数と計算、図形、測定、変化と関係、データの活用」の五領域ともに課題があるが、選択式の問題では本市の平均に限りなく近づいている傾向がみられ、角の大きさを考える事項は、改善がみられる。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	目的に応じて適切なグラフを選択し、出荷量の増減を判断し、その理由を言葉や数を用いて記述できるかを見る内容や分数の加法について、統合的・発展的に数や言葉を用いて考察する内容	
	努力が必要な問題	目的に応じて適切なグラフを選択し、出荷量の増減を判断し、その理由を言葉や数を用いて記述できるかを見る内容や分数の加法について、統合的・発展的に数や言葉を用いて考察する内容。	
理科	全体的な傾向や特徴など	平均正答数は本市の平均を少し下回る傾向である。「エネルギー、粒子、生命、地球」を柱とする四領域ともに課題があるが、エネルギーや地球領域の短答式では本市の平均に限りなく近づいている傾向がみられ、改善がみられる。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	中くらいの粒の主に水がしみ込む時間を予想し、他の条件と比較しながら理由を考察することができるかを見る内容や電流がつくる磁力について、電磁石の強さとコイルの巻数によって磁力が変化することについて考察する内容。	
	努力が必要な問題	身の回りの金属について、電気を通す物と磁石に引き付けられる物の区別をそれぞれの性質から分別することができるかを問う内容や種子の発芽条件から共通点や差異点を見つけ、新たな問題を見いだすことができるかを見る内容。	

### 4. 学校での学習活動、家庭での生活習慣等に関する質問調査結果の概要



全国平均を100としたときの本校の割合

質問調査の結果分析
<p>○本校では、例年自己肯定感が低い傾向がみられている。今年度は「自分によいところがあると思いますか。」の問いに対して80.5%の児童が肯定的な回答をしており、前年度の平均より5.5%も向上しているものの全国平均よりは下回っている。しかし、「人の役に立つ人間になりたい」と回答をした児童は、97.8%という高い結果が出ており、志を高くもち、自分の立てた目標に向かって努力しようとする思いや願いをもっていることがわかる。</p> <p>○ICTの活用や読書など学校での学習内容については、高い傾向がみられ、全国平均を上回っているものの家庭学習では、15%程度の差がみられる。このことは、探究的な学びを大切に授業改善や学校図書館・ICT等の活用を多くの子どもたちが行い、データの活用や整理分析する力がついてきている結果であると思われる。しかし、その力を家庭等の学習の中で活かしきれていないと考察する。今後は家庭学習においても主体的で深い学びを充実できるように、個に応じた指導や学習の定着を図り、楽しく自主学習やICTを活用できる個別最適な学びにするために啓発していく。</p>

### 5. 調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

#### ① 教科に関する取組

<ul style="list-style-type: none"> <li>○学校でもICT等を活用して、基礎基本の定着と向上を図る。</li> <li>○各授業において、図表やグラフ、文章など、複数の資料から必要な情報を見付けたりするようなデータの活用を今後とも高めるような工夫を図ること、読書の推進を図るなど国語科の学習や生活科・総合的な学習の時間などを活用して、個別最適な学びの育成と読解力の向上を目指すような取り組みを意図的・計画的に行えるような場を位置付けるようにする。</li> <li>○主体的・対話的で深い学びや個別最適な学びが、児童生徒の自己肯定感等に影響を与えている可能性があるため、今後も学校全体で探究的な学びを大切に授業改善を進め、自信をもち、充実感や達成感を味わうことのできる授業を実践することが必要である。</li> </ul>
---

#### ② 家庭生活習慣等に関する取組

<ul style="list-style-type: none"> <li>○家庭学習の指導・支援や読書習慣や放課後の居場所づくりへの啓発を地域と連携して行う。</li> <li>○このことを学校通信、学年通信、ホームページ等で広報し、子どもたちの安全・安心な場の確保と体験活動の充実を図るようにする。</li> <li>○今後も学校と家庭を連携して、教育全体を通して、自分のよさが発揮でき、認められる場を設定していく必要がある。</li> </ul>
---